慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メリュジーヌ伝説と記紀 : 水妖を巡る雑考2
Sub Title	Mélusine et Chroniques japonaises du 8ème siècle : réflexions sur les fées aquatiques
Author	片木, 智年(Katagi, Tomotoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.1 (180)- 13 (168)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メリュジーヌ伝説と記紀：水妖を巡る雑考２

片木　智年

深い森の中、イノシシを狩るレモンダンは主君ポワティエ伯を誤って殺めてしまう。悲嘆に暮れたまま馬を進め、真夜中、「乾きの泉」のそばに差し掛かるが、三人の美女に気づかない。そのうちの一人メリュジーヌに声をかけられたレモンダンはこのきらきらしい女性が自分の名を呼び、その運命について見抜いてみせるのに驚く。メリュジーヌを娶ること、が、土曜には決して彼女の姿を見ようとしないと誓うことを条件に、メリュジーヌはレモンダンに対し富と栄を約束し、主君殺しの嫌疑を逃れる方法を教える。二人は子宝に恵まれ、メリュジーヌは街を造り、要塞を建て、一族は栄えていく。が、あるとき兄にそそのかされたレモンダンは土曜に、水浴びをする妻の姿を覗いてしまう。彼が目にしたのは上半身は美女、下半身はうねる蛇体を現した妻であった。この秘密を隠したまま、しばしの時が過ぎていくが、あるとき息子の一人が僧院を焼き払い、そこに出家していた別の息子ともども、僧侶たちを皆殺しにしてしまったことを知る。苦悩したレモンダンは怒りのあまり、妻に「まやかしの蛇女」と罵りの言葉をかける。妻は有翼の蛇に姿を変え、城から飛び立つ。

以上が、メリュジーヌ伝説を扱ったもののうち、最もよく知られる十四世紀末のジャン・ダラスの版[1]の核心部分である。

西洋におけるメリュジーヌの歴史的テクストは中世以降に限られるのだが、幸いわれわれの文化はずっと早くから、（西洋風の言い方を受け入れるなら）メリュジーヌ型といえる逸話を収録した文献、『古事記[2]』『日本書紀[3]』をもっている。この型の話は記紀以外でも馴染み深く、蛇女の妻や蛇体の夫をめぐる伝承にとどまらず、鶴の恩返しや羽衣女房、小泉八雲の『怪談』にも収録された雪女の伝説など、枚挙にいとまがない。これらを日本の伝統では、「異類婚姻譚」と呼び、西洋でいうメリュジーヌ型の話も日本ではこちらに分類される。記紀において広義の「異類婚姻譚」と呼べるもので、私にとって印象深く、かつメリュジーヌ伝説を考える上でも示唆されることが多いものは三つある。『古事記』『日本書紀』に現れる豊玉姫と山幸彦の婚姻譚。やはり記紀に現れる活玉依姫（『古事記』）という大変示唆的な名前の姫と蛇体の神・大物主との契の話（そしてこれには『日本書紀』バージョンもある）。さらには大山津見の神とその娘、木の花の佐久夜姫と天つ日高日子番の邇邇藝の命の物語である。それに加えて、イザナギが黄泉の国へと下っていく有名な逸話も大変重要であると考えている。

まず、メリュジーヌ伝説に最も類似したテクストとして、豊玉姫の伝説を『古事記』版で取り上げよう。

ここに海の神の女豊玉毘賣の命、みづからまゐ出て白さく、「妾すでに妊めるを、今産む時になりぬ。（…）ここにすなはちその海邊の波限に、鵜の羽を葺草にして、産殿を造りき。ここにその産殿、いまだ葺き合へねば、御腹の急きに忍へざりければ、産殿に入りましき。ここに産みます時にあたりて、その日子ぢに白して言はく、「およそ他し國の人は、産む時になりては、本つ國の形になりて生むなり。かれ、妾も今本の身になりて産まむとす。願はくは妾をな見たまひそ」とまをしたまひき。ここにその言を奇しと思ほして、そのまさに産みますを伺見たまへば、八尋鰐になりて、匍匐ひもこよひき。すなはち見驚き畏みて、遁げ退きたまひき。ここに豊玉毘賣の命、その伺見たまひし事を知りて、うら恥しとおもほして、その御子を生み置きて白さく（…）。

西洋でいう典型的なメリュジーヌ型の話となっている。火遠理の命（いわゆる山幸彦）は海の底、綿津見の神の宮を訪れ、その娘の豊玉姫を娶るが、やがて身ごもった妻から、出産するときの姿を見てはいけないというタブーを課される。ところが「その言を奇しと思ほして」誘惑に駆られた主人公は妻がこもっている産屋を覗いてしまい、妻がフカの姿で這い回っているのを目にしてしまう。出産においてフカの姿を現す豊玉だが、『日本書紀』の版では出産のため此岸に「海を光して来至る」とある。これは古来の稲妻と龍の同一性に基づく表現であるから、おそらく豊玉は蛇神・龍神（＝水を司る）でもあったのだろう[4]。夫は約束を破った以上、妻が他界へと去っていくのを受け入れなければならない。それでもメリュジーヌ同様、豊玉は命に子孫を残していくのである。

ここで注目すべきは、この姫の父は海を司るのみでなく、地上の水も思いのままに操る水の神だということである。山の神である命と水の世界の一見パラドクサルな関係は、このくだりに先立つ、綿津見の神の恩恵からもわかる。婿が兄・火照（海幸彦）との争いに勝つために、義父はあるときは上の田の水を操り、あるときは下の田の水を操る。「然してその兄高田（あげだ）を作らば、汝が命は下田（くぼだ）を營（つく）りたまへ。その兄下田を作らば、汝が命は高田を營りたまへ。然したまはば、吾水を掌（し）れば、三年の間にかならずその兄貧しくなりなむ」。このあたりは『日本書紀』の版でも同様である。本来、同じ海に関わるものとして親縁性があるはずの海幸彦・火照の命を助けているのではない。山幸彦とされる火遠理の命に力を貸している。稲作、水田文化が山の民にとっても、富の形成、部族間の争いにおいて極めて重要な要素をなしていたことがよく分かる。結局この山幸彦の孫が神武天皇となったとされ、天皇家の系譜につながっていくのであるから、『古事記』が記述するこの逆説的な血縁・同盟関係はなおさら政治的である。

西洋における各種のメリュジーヌ伝説も、実はヒロインが水の世界と密接な関係を結んでいることを示している。そもそもメリュジーヌ自体、その正体が蛇ではなく、魚であるとするむきも多い（よく知られたものでは、リュジニャン家同様、メリュジーヌを始祖とするとされるリュクサンブール家、後述するサスナージュ家にとっても、メリュジーヌは蛇女なら

ず、人魚である。サスナージュ城の入り口に彫られる双尾の人魚は一つの典型である。リュクサンブール医療センターの産科に作られたブロンズ像はMelusina Materすなわち母メリュジーヌと名付けられている。メリュジーヌの母性・生む力との関係を浮き立たせるもので、印象深い）。

文学的な手の入ったダラスの版でもメリュジーヌと水の世界の関係は強調されている。彼女がレモンダンの前に姿を表すのは、「乾きの泉」であり、婚礼の準備にあたってはレモンダンが所有することになる封土に、突然湧き水を噴出させ、流れを作り出す（p.37）。ダラス自体が参照したと明記している十三世紀はじめの先行テクスト[5]では、姿を覗かれた女は蛇体となり、水浴していた水桶の底へと沈み込み、姿を消してしまう。自分の寝室の水桶が水の世界へとつながっていたと思われる不思議なディテールである(p.150)。メリュジーヌと豊玉姫との関係に立ち戻ると、ポワトゥー地方と並んで、メリュジーヌ伝説継承の重要な地であるサスナージュ家ゆかりのドフィネの伝説が大変示唆的である。歴史学者ル・ロワ・ラデュリが中世史学者のジャック・ル・ゴフと協力して書いたメリュジーヌ伝説についての大変有名な論文[6]にChorierによる*Histoire généalogique de la Maison de Sassenage*, 1669 (pp.10-20)という十七世紀の文献が紹介されている。（コロナ感染症の騒ぎと移動自粛のために、筆者はまだ現物を見られずにおり）孫引きになるが訳出しておく。「大きな岩の中に広い洞穴があり、そこには激しい流れになって、泉の水が流れ落ちている（…）。自然に形成された二つの大桶があり、それらが公現祭の日に、自ずからたくさんの水をたたえるかどうかによって、毎年の豊作と不毛を予言すると言われている（…）そこにはメリュジーヌが涼をとったり、水浴したりする習慣の場所がある」とある。この伝説は今日に至るまでドフィネの七不思議として観光客たちを魅惑しているということだが[7]、この観光的記述で占われるものは、具体的に麦とぶどうの収穫とされており、地域にちなんだ農作物と直接結び付けられているのである（ラデュリ論文でも、メリュジーヌと農業との結びつきが指摘され、メリュジーヌは時代錯誤的に新世界からもたらされた白インゲン豆とも結びついたことが示されている）。この地はポワトゥーを離れたメリュジーヌが後に暮らした地とされ、ダラスが汲み取ったであろう伝統の後日談をドフィネが取り込んでみせたのである。あるいは、ドフィネ土着の水神への信仰に、ポワトゥー由来のメリュジーヌ崇拝が都合よく縫合

されたのであろう。結局メリュジーヌも豊玉姫も、命の根源として、農作文化の大前提である水・および治水を具体的に司るのである。

そう考えると、須佐之男命による八岐の大蛇退治の話も、メリュジーヌ問題とつながってくる。八俣の大蛇は、暴れ川として出雲の地を荒らす揖斐川を表すものと頻繁に指摘される。もちろん、この川に対する人身御供と運命づけられた櫛名田姫、すなわち『日本書紀』における「奇稲田姫」の解釈も読んで字のごときものとして繰り返されてきた（武田祐吉注釈によれば八俣の大蛇退治の話は「また出水としそれを處理して水田を得た意の神話ともする」）。が、本稿の視点から見て重要なのは、この大蛇は異類婚姻譚の対象となりえただろうということである。物語には「そうはならなかったが、そうでありえただろう」というバーチャルな次元がある。そのバーチャリティを実相化させれば、櫛名田姫と大蛇の婚姻は人身御供による治水への祈願となるし、大蛇をメリュジーヌ型にあわせて女性的なものとすれば、逸話は須佐之男と荒ぶる川の女神との神婚譚となり、人間、なかんずく権力を手に入れていく過程の天皇家が、暴れ川の神との神婚を通じて、川を治める話となっただろう。が、逆にここでの水は、恵みの側面を持つ両義的な神ではなく、ただただ邪悪な自然の荒ぶりと捉えられ、ドラゴン退治の話と、それに続く稲作文化の繁栄、つまり治水と農業の問題の説明譚となっていったのである。あるときは水の神を崇拝し神婚譚を通じて、人身御供のような話を作り出し、あるときは力づくで押さえつけようとしてドラゴン退治の話を作り出す。人間は勝手なものである。この暴れ川と蛇神のモチーフもメリュジーヌ伝説の近代的展開に大きな意味を持つドフィネには見られ、「グルノーブルの街は大蛇やドラゴンに貪り食われる」というアルプスから流れ下る数々の暴れ川を形容する古いことわざが存在していたことが興味を引く（Chorier, *Histoire générale du Dauphiné*, p.19）。

次にメリュジーヌ伝説と類似を示すのは、蛇体の神・大物主と巫女の神婚譚である。これについては、すでに別のところで触れたので[8]、簡単に済ませておく。『古事記』『日本書紀』ともにこの伝説のやや異なった版を収めているが、『古事記』の版では夜毎娘のところに通う男の正体を知るために、糸束をつけ、翌日それをたどっていったら、糸は鍵穴を通って三輪

山へと延び、蛇神・大物主とわかったという話である。『日本書紀』の版では、姿を見たいと懇願する巫女に対し、「驚いてはいけない」というタブーのモチーフが示される。ところが美しい蛇体に驚いてしまった姫に対し、恥をかかせたと言って飛び立ってしまう。大物主はここでは天空を駆ける蛇である。タブーのモチーフとおそらく有翼の蛇のモチーフをあわせ持つという意味で、よりメリュジーヌ伝説に近いものとなっている。ただし、『古事記』の版にあるように蛇神との間に子孫が残り、立派な子孫を残すというモチーフは欠けている。日本における蛇神、あるいは竜神はいうまでもなく、水の神である（同時に祖霊であるという考え方すらある）[9]。巫女の力を借りて、その水の神と交わり、力を得ようという神婚の意図が透けて見えるのである。大物主はまた『古事記』では「海を光らして依り来る神」[10]であり、豊玉同様に稲妻すなわち竜神の姿を取ると示唆されていることを記しておこう。命の根源である水との良好な関係を祈願するという意味で、メリュジーヌ伝説と意味においても通底している。

くわえて、興味深いのは、『日本書紀』の版で倭迹迹姫命はこの事件の後「箸に陰を撞きて」死んでしまうが、その墓（有名な箸墓である）は、「日は人作り、夜は神作る」とされている点である。メリュジーヌ伝説における街や要塞の建造者としてのメリュジーヌの役割は印象的で、前に紹介したル・ゴフの論文の中でも、強調されているが、『日本書紀』のこの蛇神伝説でも、神は夜、墓の建設に預かるのである。中世フランスではル・ゴフの言うように、領地を広げ、建造し栄えていく地方貴族の野心を反映したものだろうが、ここでは箸墓に祀られる権力の神秘的オーラを強調するために蛇神の力が使われている（墓を作る神とは文脈からも蛇神・大物主であろう）。箸墓の埋葬者が誰であるか、さかんに議論されているだけに、いっそう重要なディテールである。

さて次に注目したい記紀の逸話は『古事記』において以下の通りである。

ここに天つ日高日子番の邇邇藝の命、笠紗の御前に、麗き美人に遇ひたまひき。ここに、「誰が女ぞ」と問ひたまへ

ば、答へ白さく、「大山津見の神の女、名は神阿多都比賣。またの名は木の花の佐久夜毘賣とまをす」とまをしたまひき。（…）ここに詔りたまはく、「吾、汝に目合せむと思ふはいかに」とのりたまへば答へ白さく、「僕はえ白さじ。僕が父大山津見の神ぞ白さむ」とまをしたまひき。かれその父大山津見の神に乞ひに遣はしし時に、いたく歡喜びて、その姉石長比賣を副へて、百取の机代の物を持たしめて奉り出しき。かれここにその姉は、いと醜きに因りて、見畏みて、返し送りたまひて、ただその弟木の花の佐久夜賣毘を留めて、一宿婚しつ。ここに大山津見の神、石長比賣を返したまへるに因りて、いたく恥ぢて、白し送りて言さく、「我が女二人竝べたてまつれる由は、石長比賣を使はしては、天つ神の御子の命は、雪零り風吹くとも、恆に石の如く、常磐に堅磐に動きなくましまさむ。また木の花の佐久夜毘賣を使はしては、木の花の榮ゆるがごと榮えまさむと、誓ひて貢進りき。ここに今石長比賣を返さしめて、木の花の佐久夜毘賣をひとり留めたまひつれば、天つ神の御子の御壽は、木の花のあまひのみましまさむとす」とまをしき。かれここを以ちて今に至るまで、天皇たちの御命長くまさざるなり。

ここで主人公の契る木の花の佐久夜姫はいうまでもなく、美しい花をつける自然の栄えを表している。いっぽうで、須佐之男命の八岐の大蛇成敗譚に続くくだりでは、その姉妹である木の花の知流姫への言及がされているので、どうやら佐久夜と知流はワンセットで木の花の両面性を現していると思わる。美しい花は咲き、しかしそれは枯れ、あるいは散り落ちるが、再び花をつける。自然の全体を見ると、枯れ落ちる花、朽ちる樹木、すべてが移ろいと再生の運命の中にある。一方で、石長比賣の顕すものは時の流れに抗う持続だが、それも永遠というものの中では一時の移ろいに過ぎない。石長と木の花の佐久夜を贈ろうとした山の神の意図に反し（これもタブーの侵犯のモチーフを隠しているようだ）、木の花の佐久夜だけと契った天つ日高日子番の邇邇藝の命の運命、さらにはその子孫の運命はこの選択によって決まる。ある選択をして、二つの幸の一つを失うが、もう一つは手に入れることができたという典型的な説明譚となっている。そういう意味からも、人間は、時に抗い永続する力は失ったが、その生に華やぎはあるのだと解釈すべきであろう。実際「天つ神の御子の御壽

は、木の花のあまひのみましまさむとす」の正確な意味はわかっていないようである。「また木の花の佐久夜毘賣を使はしては、木の花の榮ゆるがごと榮えまさむと、誓ひて貢進りき」と先の箇所で述べられている以上、ここも「木の花のような榮・華やぎのみ」と解釈したい。佐久夜は人生の比喩としての意味でも華やぎなのである。それが、本稿では倉野の「木の花のようにただもろくはかなくていらっしゃるでしょう（p.69）」、あるいはそれを踏襲した「天つ神の御子のご寿命は、木の花のようにはかなくいらっしゃるでしょう（p.188）」という次田の解釈に異を唱えるゆえんである。黄泉の国下りの話が、人間の生理的な死と誕生を説明しているように、ここでは現世の無常と、しかしそれを一時的にしろ慰める華やぎを説明しているのである。さてここまで検討してきた話は多少なりとも異類婚姻譚の要素を色濃く残した話だが、最後に、『古事記』中イザナギの黄泉の国下りの箇所にあたってみたい。黄泉の国下りではイザナミの死とそれに続く新たな存在様式として彼岸の世界は捉えられており、一般に言えば「死」の世界である。

かれ左の御髻に刺させる湯津爪櫛の男柱一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見たまふ時に、蛆たかれころろぎて、頭には大雷居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、幷はせて八くさの雷神成り居りき。

ここに伊耶那岐の命、見畏みて逃げ還りたまふ時に、その妹伊耶那美の命、「吾に辱見せつ」と言ひて、すなはち黄泉醜女を遣して追はしめき。

「蛆たかれころろぎて（…）幷はせて八くさの雷神成り居りき」は鮮烈な描写だが、死体にわき、ざわめき立つような無数の蛆は、むしろ死が生み出す全く新たな生命の旺盛なざわめきと解釈することもできるだろう。死は黄泉の国にあってさえ、沸き立つ命の側面から捉えられているのである。そしてそれこそが「八くさ」、つまり無限の神の新たな誕生として描かれているのである。

この新たなる生成としての死、豊穣としての死を見られ、それに対し恐れを抱いて逃げ出すイザナギを前に、「吾に辱を見せつ」とイザナミは言う。自らを不浄で恐ろしいものと判断されたことの恥辱であろうか。イザナミは逃げ出すイザナギに対し、「黄泉醜女を遣して追はしめき」とある。イザナギ目線から見れば、「辱を見せ」られたことへの意趣返しで、この「ケガレ」の時空へと今はまだ此岸の世にあるイザナギをも引き込んでしまおうというモチーフだと思われる。ところがこの黄泉醜女も、その追跡においてこれまた生の力を余すところなく示すのである。「黒御鬘を投げ棄てたまひしかば、すなはち蒲子生りき。こを摭ひ食む間に逃げ行でますを、なほ追ひしかば、またその右の御髻に刺させる湯津爪櫛を引き闕きて投げ棄てたまへば、すなはち笋生りき。こを抜き食む間に、逃げ行でましき」。

この箇所はイザナギの視点から見ると民俗学で言う「呪的逃走」のモチーフである。が、黄泉醜女をフォーカスにすえると、この追跡は激しい飢えと食欲の印を通して、死者の世界の生への執着と生の汪溢をパラドクサルに、見せつけてくれるのである。

ここで産屋を覗かれた豊玉姫の言葉を思い出しておこう。「ここに豊玉毘賣の命、その伺見たまひし事を知りて、うら恥しとおもほして、その御子を生み置きて白さく、『妾、恆は海道を通して、通はむと思ひき。然れども吾が形を伺見たまひしが、いと怍しきこと』とまをして」とある。三輪山伝説の『日本書紀』版でも、蛇体の姿に驚く相手に対し、大物主は「大神恥ぢて」とあり、「汝、忍びずして吾に辱せつ」（p.292）と言うのである。「吾に辱を見せつ」とはしたがって、タブーを破って、生ではあらざるもの（ここでは否生と呼ぶ）の姿を見てしまった配偶者に対し、この否生の世界のものが発する言葉である。生者からすれば、否生の世界は直感的に怖れと忌みの対象であり、「死」であり「ケガレ」となる。イザナギが黄泉醜女やイザナミ本人の追跡からなんとか逃れ得て、行った最初の行為は「ミソギ」であることを思い出す必要がある（死せるイザナミの忌むべき対象としての描写は後の再録である『日本書紀』の版においてさらに強調される。すなわち「膿湧き蛆流る」p.44「張満れ太高へり」p.54）。豊玉姫の逸話で産屋を建ててこもることは生みの「ケガレ」と結びついていたことは言うまでもない。否生は「ケガレ」であり、そんな姿を生者に知られてしまうことは、否生の者にとって「恥ず

べきことに違いない」という生者側の感情の投影が行われた結果のセリフだろう。が、否生はもちろんそんな生者側の感情の外側にあるはずだし、否生を「死＝ケガレ」とするのは生者にとって自らの両目を覆い隠すようなものだといえる。このことと見るなのタブーが通底しているのは直感的に理解可能である。見てしまうことで、生者は否生の世界を「ケガレ」「死」と断じてしまうからだ。さまざまな伝説、民話に現れるように実は「見るな＝見ろ」[11]であるとすればこのタブーは大変に意味深いものとなる。

この生者の感情の投影は、換言すれば生者の側から否生のものに「恥をかかせてしまった」という罪悪感につながっていく。それがきっかけとなって、生者と否生の神的なものとのあいだに別れが生じてしまった。そのことが生者と否生のもの、人間界と自然界の間の完全な調和を壊してしまったという解釈上のなりゆきだと考える。人間がこれまでも、そしてこれからも永劫に苦しむことになる否生であり否死でもあるといえる自然界（そしてそれと渾然一体化した超自然）との不調和をこの解釈が説明していると考えるのである。大物主の場合は古代の蛇神信仰の問題もあり、水の恵みを司る神である一方、祖霊につながるとはいえ死の世界のケガレ、蛇という生き物自体への嫌悪も相まって、神聖とケガレの両価性を持ってしまっている。それゆえいっそうこの罪悪感は深刻である。その点は、恥をかかされたことに対する大物主が姫にかけるお返しの言葉「吾還りて汝に辱せむ」（『日本書紀』p.292）や、古事記で語られる疫病をもたらす祟り神の側面からも説明ができる。いずれも人間の内心のおそれと罪の意識の表現であろう。

さて、この自然界との離別のテーマに恥という感情が使われること自体から、古代日本から日本人の最も忌むべき社会的感情の基層に、「恥」があったのではないかと推測することも暴論ではないであろう。最近共訳した『感情の歴史Ⅰ』のあとがき[11]で筆者はこの恥の感情について触れたが、実は日本古代のテクストに現れる恥について、時代錯誤を承知の上で語る誘惑にさえ駆られた（結局それは見送った）。以下の引用が筆者のあとがきからのものである。

この「恥」は、われわれの中にさまざまなシチュエーションで湧き上がる、身体的サインも備えた主要感情だ。そしておそらくたいへんに人間的だ。「恥を知る」動物はそうそういないように思える。ルース・ベネディクトの『菊と刀』のインパクトがあまりに大きいので、多くの日本人はこの感情に意識的にならざるを得ない。ベネディクトが恥を日本人の心性を支配する主要な感情とし、キリスト教、なかんずく米国のピューリタン社会の道徳の源泉である「罪」と対比させたのはあまりにも有名である（『菊と刀』越智敏之・越智道雄訳、平凡社文庫 p.274）。確かに、この著作が出て八十年近くになるこんにちでも、世間体を気にするばかりでなく、まわりへの同調気質とも関連している「恥」の文化をわれわれはひきずっていると感じる。が同時に、この「恥」の意識は、単に世間の評価や判断を前にしたものにとどまるわけではない。世間とは無関係に、われわれの中にある視線、ある審判の意識が内在化され、その基準においていろんなシチュエーションで湧き上がる感情である。

日本古代における異類婚姻譚、その契がタブーの侵犯によって崩れる際の「恥」の意味。それはおそらく深い次元を持つものであろうと推測される。すでに古代において日本人の心性の重要な根幹を形作っていたのではとすら筆者は考えている。

最後に、まとめておこう。

豊玉が見せるうねるフカの姿、大物主が顕す蛇体、大山津見の神とその二人の娘、すなわち石長と木の花の佐久夜が表すものを考え合わせたとき、それらはあるいは動植物が姿を現しては消えていく自然界の表現のようにも見えるが、海の彼方の国が「此岸」の時間を超えているように（浦島伝説を思い出せば良い）、此岸の世界とは別次元の時間・空間にあるものである。我々が生きていると思っている時空を「此岸」すなわち生の時空だとしたら、そうではないものを本論では否生とよぶことにした。とはいえ否生は此岸の否定であるとしたら、それは死なのであろうか。単純化するわけには行かない。われわれは誰も死を経験していない。死をほんとうの意味で知ることは不可能で、死とはわれわれにとって生ではないもの、

つまり否生でしかないのである（ましてそれはキリスト教で言われるような原罪の結果としての悪、そこから贖罪や赦しによって乗り越えられるべきものではもちろんない）。

肉体の活動は終わりを告げる。おそらく肉体が演出する神経系統の表象も終わりを告げる。その結果とは「もともとのもの」でしかない。否生は「もともとのもの」・本然なのである。その中に明滅するように現れた人間・個人個人はその個人の神経系統によって自身の時間と空間を表象し、それが世界であると思い・感じるが、否生を十全に理解し、感じることはできない。言うまでもないことである。が、それではそんな「もともとのもの」から、われわれは完全に除外されているのであろうか。そうではないという直感もわれわれはもっている。これは人間の神経系統のパラドクスであるが、その神経系統が「もともとのもの」の一部であることを考えると不思議なことではないだろう。この「もともとのもの」をわれわれは自然の中に感じようとする。われわれは自然と対峙しているのではなく、われわれ自身自然なのであるから。

註

（1）本稿では以下の版を参照：Jean d'Arras, *Mélusine*, édité par L. Stouff, Dijon, Bernigaud Priva, 1932. Publié en ligne par la Base de français médiéval, http://catalog.bfm-corpus.org/melusine. Dernière révision le 2005-03-30.

（2）本稿における『古事記』からの引用は、稗田の阿礼、太の安万侶、武田祐吉注釈校訂　青空文庫版より（https://sites.google.com/site/kansekigenten/kojiki）底本：「古事記」角川文庫、角川書店　１９５６（昭和31）年５月20日初版発行　１９６５（昭和40）年９月20日20版発行。入力：川山隆、校正：しだひろし２０１３年５月21日作成。なお引用中の表記はこの版のままだが、本論中では適宜「豊玉姫」「イザナギ」というように一般的な表記にしてある。また本稿ではこの版をもとにルビと外字の処理をした。

（3）『日本書紀』の引用は『日本書紀（一）』（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、岩波文庫、一九九四）より。

（4）「大己貴、大国主、大物主」を含め記紀のさまざまな男性神、雷と蛇の関係はたとえば、中西進が強調する。『古代ヤマトと三輪

山の神』大神神社編、学生社、２０１３、p.67-68.

(5) Tilbury, G. d. *Le Livre des merveilles*, Belles Lettres, 1992, p.150

(6) Le Roy Ladurie Emmanuel, Le Goff Jacques. Mélusine maternelle et défricheuse. In: Annales. Economies, sociétés, civilisations. 26ᵉ année, N. 3-4, 1971. pp. 587-622 doi : https://doi.org/10.3406/ahess.1971.422431https://www.persee.fr/doc/ahess_0395-2649_1971_num_26_3_422431 Fichier pdf généré le 11/04/2018, p.611.

(7) https://www.lessor38.fr/cuves-de-sassenage-entrez-dans-l-univers-de-la-fee-melusine-19665.html,consulté le 20 sep. 2020.

(8) 『少女が知ってはいけないこと：神話とおとぎ話に現れる「女性」の歴史』ＰＨＰ研究所、２００８

(9) 吉野裕子『蛇』講談社学術文庫、１９９５　p.277-289

(10) この時に海を光らして依り來る神あり。(…)「吾をば倭の青垣の東の山の上に齋きまつれ」とのりたまひき。こは御諸の山の上にます神なり。

(11) ご興味をいただける方は、拙著を参照していただきたい。『ペロー童話のヒロインたち』１９９６、『少女が知ってはいけないこと』２００８

(12) 片木智年監訳、藤原書店、２０２０